

水鳥通信

バードリサーチ

2025年3月号



アメリカヒバリシギ Photo by 石橋 隼

シロハラチュウシャクシギの衝撃

守屋 年史(バードリサーチ)



種の絶滅

2024年の11月に、衝撃的なニュースが報じられました。国際的な鳥類研究者のグループが、シロハラチュウシャクシギ(*Numenius tenuirostris*)が、絶滅したとする論文を発表したのです。

シロハラチュウシャクシギは、チュウシャクシギによく似たシャクシギの仲間で、淡色で白っぽく、胸部と脇腹に丸またはハート形の暗色斑紋があります。生息域は、西シベリアのオムスク近郊で記録があるほかは、正確な繁殖域はよくわかっておらず、冬は中央アジア、東ヨーロッパ、中東、地中海沿岸で越冬する記録があります。灌木が茂る広大な泥炭湿原の生息環境で、湿原内の小島のような環境を利用して繁殖し、渡りの際や越冬期は、沿岸のラグーンや塩性湿地、河口、内陸の沼地のような環境を利用するとされています。

近年では、1995年にモロッコ北部で観察されて以降、確実な目撃情報は報告されておらず、この種を広範囲にわたって集中的に搜索する活動が継続されていました。今回、研究グループは、国際自然保護連合(IUCN)の絶滅確率の枠組みを使用し、この種に対する潜在的な脅威、調査努力、過去の記録(博物館の標本、確認された目撃情報、未確認の目撃情報など)を考慮して絶滅の確率を評価しています。この評価モデルでは、シロハラチュウシャクシギ絶滅の可能性は、96.0%であると示しており、IUCN

レッドリストのガイドラインに従って絶滅種に分類されてしまいました。また報告では、絶滅推定モデルによって、絶滅年は1995年の最後の目撃例の頃であると推定されています。

シロハラチュウシャクシギを絶滅に導いた明確な要因は不明ですが、この報告ではいくつかの推定要因が挙げられています。一つは、生息地の喪失と劣化です。19世紀以降の広範囲にわたる農業開発による湿地の喪失が主要な脅威と考えられています。推定繁殖地であったウラル山脈東部やカザフスタン北部、多数の記録があった中継地のパンノニア平原(ハンガリー盆地)。また、主要な越冬地であったモロッコのマグレブ地域でも、ほとんどが農地に転換されています。もう一つは狩猟です。本種は他のシギ類よりもおとなしく、潮上帯の採食を好むため、狩猟に対して脆弱であった可能性が指摘されています。

日本の記録

シロハラチュウシャクシギは、日本の鳥類目録に掲載されています。ただ、50年以上記録はなく、日本産であるほかは詳細が不明な2体の標本があったのみです(すでに焼失)。日本では迷行と考えられますが、再び日本で観察される機会が永遠に失われてしまったことは残念でなりません。

引用文献

Buchanan, G.M., Chapple, B., Berryman, A.J., Crockford, N., Jansen, J.J.F.J. and Bond, A.L. (2025), Global extinction of Slender-billed Curlew (*Numenius tenuirostris*). Ibis. <https://doi.org/10.1111/ibi.13368>



北海道で観察したアメリカヒバリシギの日本初記録

石橋 隼（東京農業大学生物産業学部）・城石 一徹（日本野鳥の会オホーツク支部）



図1. 2022年9月25日に小清水原生花園の砂浜海岸で撮影したアメリカヒバリシギ(撮影:石橋 隼)

アメリカヒバリシギ

アメリカヒバリシギ *Calidris minutilla* は、体長13 cm のチドリ目シギ科オバシギ属の鳥類である (Chandler 2009)。北米大陸北東部を除くアラスカ西部からニューファンドランド島にかけて繁殖し、北米大陸南部から南米大陸北部で越冬する (Chandler 2009)。国内における本種の確実な記録は無く、本観察記録について記載した石橋・城石 (2024) が日本における初記録である。

飛来地の環境

本個体は北海道小清水町に位置する、小清水原生花園の北側にある砂浜海岸で観察した。本個体を観察した小清水原生花園は、オホーツク海と濤沸湖の間に形成された砂嘴の中にあり、北側をオホーツク海、南側を海岸砂丘に囲まれている。また、砂丘上には海浜植物群落が広がっている。

観察個体の特徴

本個体の大きさは、同所で観察したミュビシギ *Ca. alba* やメダイチドリ *Charadrius mongolus* より小さく、トウネン *Ca. ruficollis* より一回り小さく見えた。嘴はやや下に湾曲しており、嘴基部まで黒色であった (画像1)。頭部から上背にかけて黒褐色で、腹から下尾筒にかけて白色であった (図1, 2)。脚は黄緑色で、嘴 (露出嘴峰長)、跗蹠、爪を含んだ中趾の長さの比は、ヒバリシギ *Ca. subminuta* と比べて小さかった (石橋・城石 2024)。本個体の羽衣は摩耗が進んでいたものの、幼羽であった (図1, 2)。

観察報告

2022年9月25日 (日) 15時18分頃、小清水原生花園内の砂浜海岸にて、私 (観察者: 石橋 隼) は沖にいたクロガモの群れを観察しながら遅めの昼食を取っていた。その際に、西北西方向から飛んできた9羽のシギ・チドリ類が近くの砂浜上に降り立ったため観察を開始した。観察開始直後はメダイチドリ4羽、ミュビシギ3羽、トウネン1羽、(暫定) ヒバリシギ1羽であると思った。しかし、砂浜海岸で観察する機会の少なかった (暫定) ヒバリシギを注視して観察していたところ、体形に強い違和感を覚えた。ヒバリシギとしては嘴が長く、脚が短く見え、平行姿勢に見えた点が明らかに異なっていた。印象としては、「嘴の重そうな短足のヒバリシギ」といった感じであった。以上より、私は本個体をアメリカヒバリシギまたは雑種の可能性があるシギ類であると思い、証拠を残すため観察・撮影を行った。本個体は他のシギ・チドリ類と共に砂浜海岸を走り回り、しばらく小型の無脊椎動物を捕食していた (表紙)。しかし、15時27分頃に釣り人が動いたことに対して警戒姿勢をとり、直後に他のシギ・チドリ類と共に北東方向の海上へ飛び去って行った。本個体の観察後、文献や記録の整理を行うにつれて、本個体の特徴がアメリカヒバリシギの幼鳥と一致し、類似種や雑種の可能性があるシギ類と特徴が異なっていた。以上より、私は本個体をアメリカヒバリシギの幼鳥であると同定した。なお、城石が同月27日に観察地点にて本個体を採したが、確認することはできなかった。本記録に関する詳細および種の同定基準については、石橋・城石 (2024) を参照して頂きたい。



図2. アメリカヒバリシギ(撮影:石橋 隼)

引用文献

- Chandler R (2009) Shorebirds of the Northern Hemisphere. Christopher Helm, London.
石橋 隼・城石 一徹 (2024) 北海道小清水町におけるアメリカヒバリシギ *Calidris minutilla* の日本初記録. 日本鳥学会誌 73 (1): 113-116.

鳥類目録第8版でのカモの分類変更

神山 和夫(バードリサーチ)



日本鳥学会が2024年に発表した日本産鳥類目録第8版では、カモ類の分類に大きな変更がありました。*Anas*属とされていた大きなグループが4つに分かれて、新しく*Mareca*、*Spatula*、*Sibirionetta*という属名が使われるようになりました(図1)。和名の変更はないので私たちが呼んでいるカモ類の名前は変わり

ません。新しい属にまとめられた種には、どのような特徴があるのでしょうか。外見についてだけですが、識別の役に立ちそうな特徴についてまとめました。オスは羽色の違いで属の共通点が見えにくくなるので、メスの写真を使って解説します。

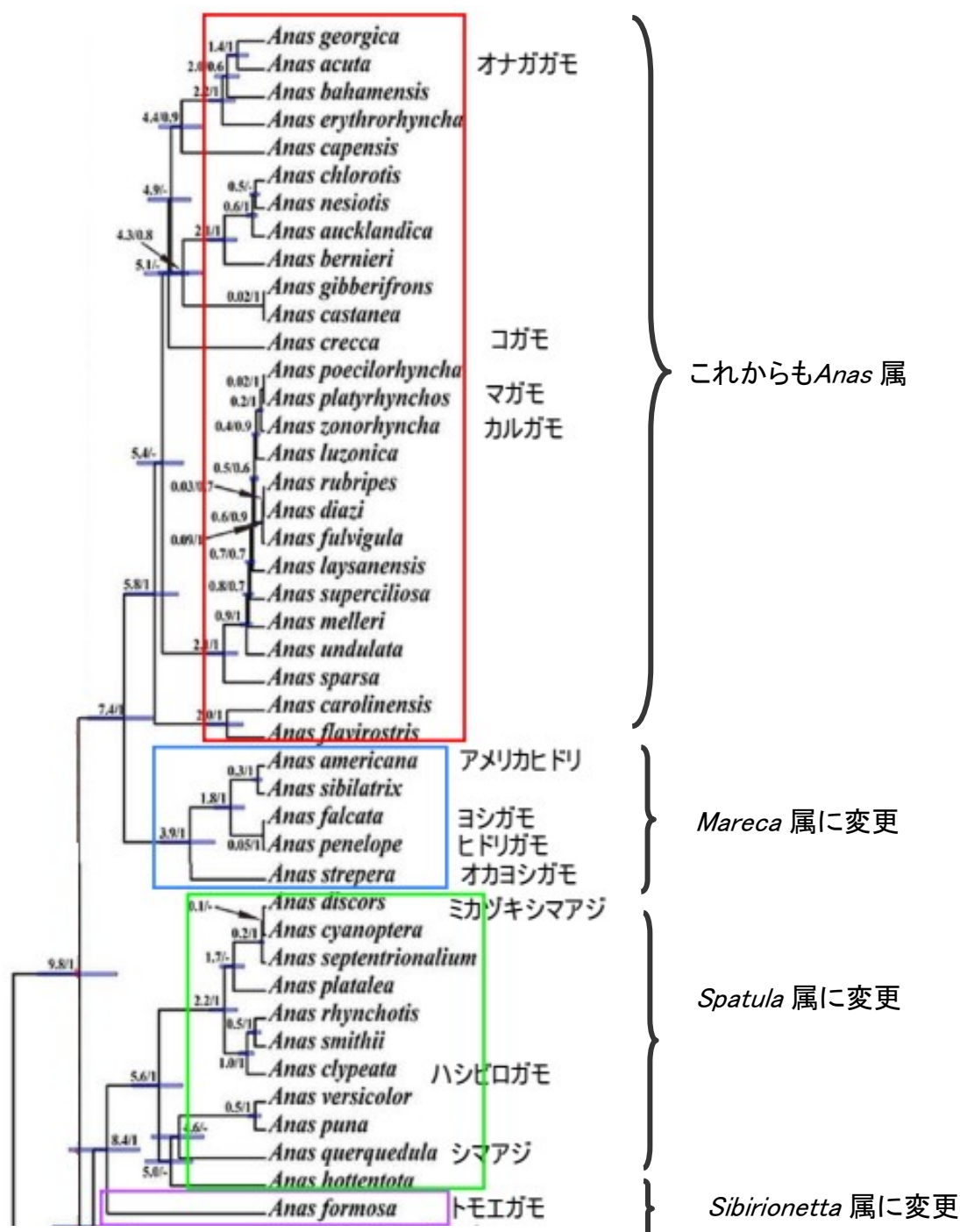
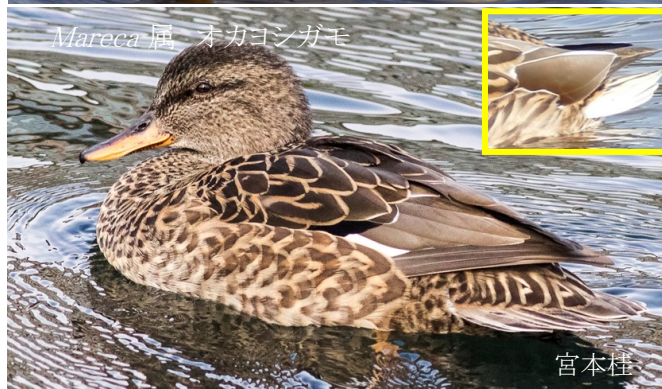


図1. カモ類の分類体系。学名は旧分類の*Anas*属になっている。(Sun et al. 2017.をもとに作図)



(参考)黄色い囲みはマガモ雌の大きな三列風切り

Mareca 属は草食性が強いカモの仲間です。水草はもちろん、ヨシガモとヒドリガモは群れで陸に上がり草を食べていることもよくあります。いずれも額からくちばしまでの傾斜が急で、ヨシガモとヒドリガモの雌は目の周囲が黒んでいます。オカヨシガモの雌はマガモの雌と似ていますが、白い翼鏡(次列風切)があること、そしてマガモの雌のような大きな三列風切りがないことで識別できます。大きな三列風切りがないことはマガモとの違いで一番見やすい特徴なので、覚えておきましょう。



Spatula 属は先端が広がった大きなくちばしを持つことが特徴です。シマアジのメスはコガモに似ていますが、頭頂部が平たく見えますから、それに気付いたらくちばしの形に注意してください。

Sibirionetta 属は世界でもトモエガモ1種しかいないグループです。こちらもコガモサイズですが、体の上面に長く黒い羽が多いことが特徴です。くちばし付け



根の白斑はコガモでも見られる個体がいるので、そこだけで判断しないようにしましょう。

参考文献

Sun, Z., Pan, T., Hu, C., Sun, L., Ding, H., Wang, H., ... & Zhang, B. 2017. Rapid and recent diversification patterns in Anseriformes birds: Inferred from molecular phylogeny and diversification analyses. PLoS One, 12(9), e0184529.

オシドリの地上営巣事例

太田 峰夫



はじめに

オシドリは中国東部、台湾、ロシア極東南部、朝鮮半島、日本で繁殖し、関東地方から西部で越冬する(藤巻2013)。巣はおもに樹洞を利用し、まれに石垣の隙間や鉄橋の橋脚の穴に巣を作るとされています。今回、オシドリの地上での営巣を観察したので報告します。

確認地点の環境

確認したのは静岡県掛川市の標高75mの谷戸です。幅約100m長さ500mの谷の深部をせき止めて作った農業用ため池のわきの斜面です。

周囲の植生は、ため池に接した5mほどの斜面はカシが優先する常緑広葉樹で、それから離れた斜面は林齢50年ほどのスギ植林地です。営巣地点の周囲は、まばらにコシダに覆われていました(図1)。

発見の経緯

オシドリが地上に営巣しているのを確認したのは、2024年4月29日でした。それに先立つ4月26日に鳥類の観察とは違った目的で、付近の作業道を歩いた際、地面からオシドリが飛び立つのを観察したが、その時は営巣しているとは思っていなかったのもそのままだち去りました。その後4月29日に再び当所を訪れた際、同じ場所からオシドリが飛び立ったため、そこをのぞくとコシダと、羽毛を敷いた巣を確認しました。巣内には、2個の鶏卵大の卵がありました(図2)。



図1. 営巣環境



図2. 確認したオシドリの巣(2024年4月26日)

その日は、繁殖への影響を考え写真撮影だけのとどめその場を離れました。その後5月4日にも巣内から親鳥が飛び立ち、巣内には前回同様2つの卵がありました。この日は、巣内をじっくり観察すると卵の一つは上からつついたようなへこみがあり、4月26日に撮った写真にも同様なへこみがありました。巣は外部をスギの葉がついた枝で囲み内部の産座には多くの綿羽や半綿羽が敷き詰めてありました。その外径は38cm、産座の直径は18cmでした。最初の確認から17日を経た5月14日には、巣内や周囲には卵も卵殻もなく、林内や池のものオシドリの姿は確認できませんでした。巣は産座に敷き詰められていた羽毛はなくなっていました、周囲を囲んだスギの葉はほとんどそのままの形で残っていました(図3)。

以上の経過から、今回のオシドリは地上で営巣したが、何らかの理由で卵は孵化しないで、繁殖は中断したものと考えられます。中断の理由は、明らかではありませんが、捕食者による卵の捕食が最も考えられます。オシドリは静岡県では主に冬鳥で、夏季は山間部の溪流で姿は確認されていたが、繁殖事例は少



図3. オシドリの巣(2024年5月14日)

なく、全国鳥類分布調査でも静岡県内での繁殖確認は山間地で1例報告されていますが、平地での繁殖事例は初めてだと考えられます。

参考文献

藤巻裕蔵 (2013). オシドリ. バードリサーチ生態図鑑. バードリサーチ. 東京

野付半島におけるシマアジの繁殖記録

藤井 薫 (野付半島ネイチャーセンター)



シマアジ繁殖の兆候

野付半島でのこれまでのシマアジ(*Spatula querquedula*)の記録は2006年9月14日に26羽というまとまった数の群れが記録されたことはありますが、どちらかといえば数の少ない渡り鳥と考えられていました。ところが2017年頃より現在まで、1〜2つがい野付半島野鳥観察舎(図1)の設置されている通称淡水池(位置図)で毎年観察されるようになりました。

この淡水池ではマガモ、カイツブリ、オオバン、バン、クイナなどの水鳥が毎年繁殖していることから、シマアジ(図2)も繁殖しているのでは、との期待がありました。2017年から毎年確実に雄雌揃って5月上旬には野付半島の淡水池に渡来し、9月頃まで観察されることから繁殖の可能性が高いと判断して注意深く観察してきましたがこれまでは確実な繁殖記録は報告されていませんでした。しかし、当時センター専門員であった石下亜衣紗氏から2024年の6月に、過去の野付半島での撮影写真を整理する中で、2019年7

月31日に野付半島の淡水池でヒナ1羽を連れたシマアジ(図3)の家族群を観察撮影(43° 33'45"N 145° 20'46"E)していたとの情報がもたらされ、これが野付半島におけるシマアジの確実な繁殖記録となりました。シマアジは2024年も少なくともひとつがいが5月上旬から渡来しており、繁殖を継続しておこなっている可能性が高いと考えられることから、今後も注目して観察していきたいと思います。

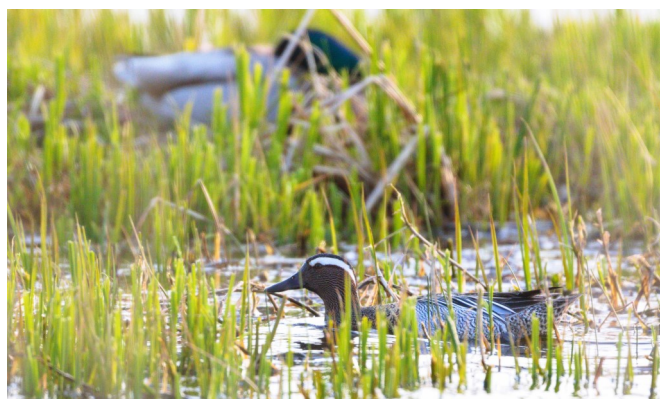


図2. シマアジ雄(2017年5月20日 淡水池)



図1. 野付半島野鳥観察舎(通称: 淡水池ハイド)の位置



図3. シマアジ雌とヒナ
(2019年7月31日 撮影: 石下亜衣紗)

バードリサーチ 水鳥通信 2025年3月号(26号)

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都国立市東1-4-28-302
TEL & FAX 042-505-4044
E-mail: br@bird-research.jp

発行者: 高木憲太郎

URL: <http://www.bird-research.jp>

編集者: 神山和夫・守屋年史

タイトル写真募集中!

ご提供いただける方は
写真を電子メールにてお送りください!



このニュースレターはFSC認証紙を使用しています。